宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第132集

東九州自動車道（門川～日向間）関連
埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅰ

平成17年度

２００６
宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、平成11年度から日本道路公団の委託により東九州自動車道都農～西都間建設予定地にかかる埋蔵文化財発掘調査を実施しております。平成17年度は、当該区間の発掘調査を実施する一方で、新たに門川～日向間の発掘調査に着手いたしました。

この門川～日向間では、門川町に１遺跡、日向市に６遺跡が確認されております。まだ調査に着手したばかりではありますが、既に門川町分蔵遺跡の調査が終了し、現在は日向市を中心に本調査及び確認調査を実施しております。本書はその概要報告書です。

分蔵遺跡のある門川町は、縄文時代後期後半から晩期にかけての黒色磨研土器が散見される地域ですが、この分蔵遺跡でも該期の遺物が発見されました。これらの遺物が、門川町の中央を貫く五十鈴川河口平野部の入り口とも言えるこの場所で確認されたことは、当時これら北からの文化が中九州あるいは東九州を経てこの地域へ定着していった過程を考える上で貴重な成果となりました。

ここに掲載した内容は、本格的な発掘調査報告書刊行までの速報的なもの、あるいは今後の発掘調査を予見するためのものとも言えますが、これらが埋蔵文化財保護に対する理解の一助としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などでも活用されれば幸いです。

最後に、調査に当たって御協力いただいた関係諸機関並びに地元の方々に対し、心から厚く御礼申し上げます。

平成18年３月

宮崎県埋蔵文化財センター
所　長　　宮　園　淳　一

目次

第Ⅰ章　はじめに　1
第１節　発掘調査の経緯……1
第２節　調査組織……2

第Ⅱ章　確認調査の状況　4
池ノ下遺跡……4
権現原遺跡……4
塩見城跡……6
中山遺跡……6

第Ⅲ章　本調査の成果　8
板平遺跡……8
分蔵遺跡……9

図目次

第１図　東九州自動車道（門川～日向間）関連遺跡の位置……3
第２図　トレンチ配置図と周辺地形（池ノ下遺跡）……4
第３図　権現原遺跡出土縄文土器……5
第４図　トレンチ配置図と周辺地形（権現原遺跡）……5
第５図　塩見城跡縄張り図及び中山遺跡トレンチ配置図……7
第６図　調査区と周辺地形（板平遺跡）……8

表目次

表１　東九州自動車道（門川～日向間）関連遺跡一覧……2
表２　基本層序（板平遺跡）……8
表３　基本土層（分蔵遺跡）……9
報告書抄録……奥付

写真目次

写真１　板平遺跡作業風景……2
写真２　門川町歴史講座（分蔵遺跡）……2
写真３　分蔵遺跡空中写真（西から）…9
写真４　分蔵遺跡出土遺物……10

例　言

1　本書は、平成17年度に実施した東九州自動車道（門川～日向間）建設工事に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査概要報告書である。

2　発掘調査は、宮崎県教育委員会が日本道路公団九州支社（現西日本高速道路株式会社九州支社）から委託を受け、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。

3　本書の第１図遺跡位置図は、国土地理院発行の1/25,000の図をもとに作成した。

4　本書に記載された遺跡の調査内容・成果は、平成17年12月末現在で把握しているものであり、今後の調査・検討の結果、変更する点が生じる可能性がある。

5　本書で用いた標高は海抜高である。方位は座標北（Ｇ．Ｎ.）である。

6　本書の執筆は、各調査員が分担して担当した。なお、執筆者名を文末に示した。

7　本書に使用した実測図等の浄書及び掲載した写真の撮影は各遺跡の調査担当者がおこなった。

8　本書の編集は今塩屋毅行、岡田　諭、大野義人、井上美奈子が担当した。

9　調査の記録類、各遺跡の出土遺物は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査の経緯と概要

東九州自動車道は、福岡県北九州市を起点とし大分、宮崎、鹿児島４県の東海岸部を南北に走る約436㎞の高速自動車国道である。

宮崎県では、平成元年に延岡～清武間が基本計画区間に決定され、このうち西都～清武間については平成３年に整備計画区間となり、同５年に建設大臣の施工命令が出されている。発掘調査は、日本道路公団の依頼により宮崎県教育委員会が平成７年度から着手、平成13年度にすべての遺跡の記録保存措置が完了している。

この間、平成８年12月の第30回国土開発幹線自動車道建設審議会において、清武～北郷間約19㎞とともに門川～西都間59㎞が整備計画区間に決定され、平成11年度からは都農～西都間約25㎞について79遺跡896,000㎡の発掘調査を開始している。

一方、門川～日向間約14㎞については、平成15年８月に同公団から遺跡の分布調査依頼を受け、翌16年３月、７遺跡174,000㎡の埋蔵文化財包蔵地の所在を回答している。そして、門川～日向間を担当する同公団延岡工事事務所が開設された同年11月には、工事計画や用地取得、埋蔵文化財調査等の調整会議も開催されている。

また、平成17年２～３月には「埋蔵文化財発掘調査におけるコスト縮減及び限定協議に伴う除外面積について」の協議が同公団と文化課との間でなされ、これにより発掘調査対象面積が当初の174,000㎡から91,400㎡に縮減された。

なお、ここでいう『コスト縮減』とは、建設コスト削減のため４車線から暫定２車線に車線数を減らすことであり、これに伴い当面調査対象から除外される面積が生じるものである。

また、『限定協議』とは、橋脚間や道路構造令に準拠しない側道部分など、当面地下の埋蔵文化財に影響を及ぼす恐れのない場合において、今回発掘調査を必要としない箇所を協議するものである。

平成17年６月、文化財課（改組名称変更）に同公団から発掘調査経費の見積依頼がなされ、翌７月１日付けで同公団九州支社と宮崎県教育委員会との間で委託契約を締結している。

その後は宮崎県埋蔵文化財センターが用地取得の進捗状況を見ながら確認調査・本調査を実施している。

なお、日本道路公団は、平成17年10月１日に分割民営化され、西日本高速道路株式会社九州支社が契約を引き継いでいる。民営化前後の時期は、用地買収や発掘調査等にも少なからず影響が及び、通常、取得用地が比較的まとまった時期に調査対象区の10％を目途に実施してきた確認調査についても、本年度は限定的かつ部分的に実施している。

確認調査の目的は、遺跡の文化層・範囲などの残存状況の把握であるが、なかには土取りや地形の改変などにより文化層が消滅し本調査の必要がない遺跡も見受けられる。

今回の区間で本調査に移行したのは、東臼杵郡門川町の分蔵遺跡と日向市の板平遺跡の２遺跡である。また、日向市の権現原遺跡は、塩見川の右岸に位置し、丘陵地を中心に縄文時代早期や中世の遺物が出土したが、地形の改変等で既に包含層が消滅しており、確認調査のみで終了している。その他の遺跡については、今後も引き続き用地の取得状況を見ながら文化層等の残存状況を確認していく予定である。

本調査を実施した分蔵遺跡は、五十鈴川右岸の山裾に位置し、洪水砂等に混入したような状況で縄文時代晩期を中心とする遺物が出土している。本年度は、その一部について整理作業を実施している。

また、塩見川支流の富高川左岸河岸段丘上に位置する板平遺跡は、平成18年度も継続して発掘調査を行う予定であるが、現在までのところ陥穴状の土坑や竪穴住居跡等が検出されている。

平成17年度は、現地説明会等は開催できなかったが、普及啓発活動として分蔵遺跡において10月に門川町郷土史講座の見学受け入れ、板平遺跡において教職経験10年経過研修の受け入れ等を実施している。

第２節　調査組織

調査の組織は次のとおりである。

調査主体　宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所　　長　　宮園　淳一

副所長兼調査第二課長　　岩永　哲夫

総務課長　　宮越　尊

主幹兼総務係長　　石川　恵史

調査第一課長　　髙山　富雄

調査第一課調査第一係

主幹兼調査第一係長　　長津　宗重

（調査担当）　主事　　森本　征明

（整理作業担当）　主査　　小山　博

主査　　興梠　慶一

調査第一課調査第二係

主幹兼調査第二係長　　菅付　和樹

（調査担当）　主査　　向江　修一

主事　　三品　典生

主事　　岡田　諭

主事　　渕ノ上隆介

調査員　　石津　晴菜

（予算調整担当）　主査　　松林　豊樹

（作業員雇用担当）　主査　　長友　久昭

（文責　菅付和樹）

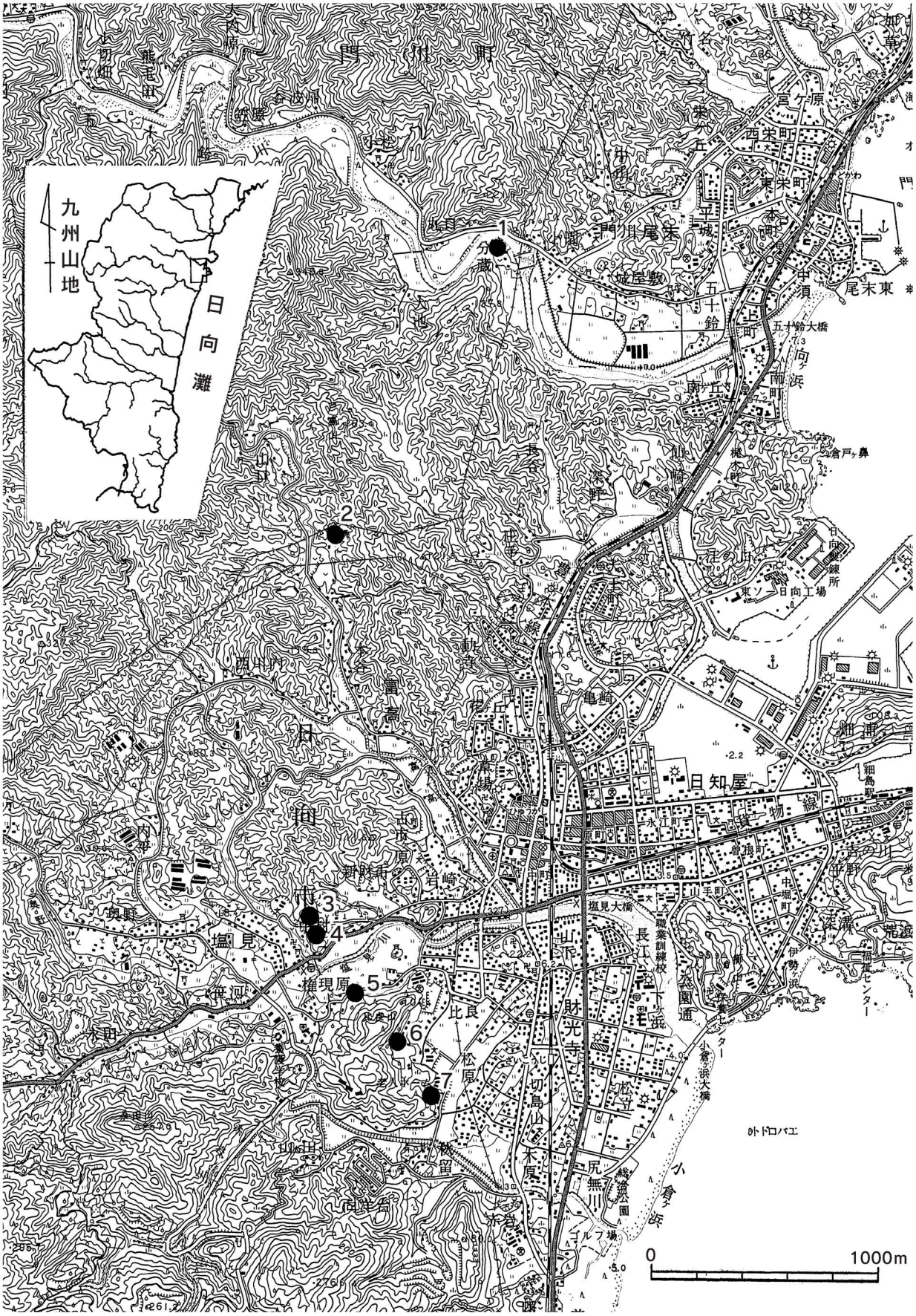
表１　東九州自動車道（門川～日向間）関連遺跡一覧

市町	番号	遺跡名	所在地	遺跡面積（㎡）	調査面積（㎡）	年度	種別	主な遺構・遺物の時代	調査期間	備考
門川町	1	分蔵	門川町大字門川尾末字分蔵	900	78	17	確認	縄文［後・晩］	17.8.8～17.8.11	
					534		本掘		17.9.29～17.11.4	
日向市	2	板平	日向市大字富高字板平・程ヶ迫ほか	21,960	1,500	17	確認	旧石器、縄文［早］、弥生～古墳	17.8.22～17.10.3	
					4,700		本掘		17.10.20～	
	3	塩見城跡	〃　大字塩見字古城内	12,500		17	確認	中世	17.11.14～	
	4	中山	〃　大字塩見字古城内・上ノ坊	14,800	150	17	確認	旧石器、古墳、中～近世	17.11.14～	
	5	権現原	〃　大字塩見字瀬ノ口・清水ほか	17,400	192	17	確認	縄文［早］、中～近世	17.11.10～17.12.20	
	6	池ノ下	〃　大字塩見字権現原山添	6,600		17	確認	－	17.11.10～	
	7	大谷尻	〃　大字平岩字下モノ原	14,800		17	確認	－	17.11.10～	

注　＊ゴシック文字の遺跡は，調査終了．
＊「遺跡面積」は当初の想定遺跡面積．「調査面積」は実掘の表面積．
＊数値等は，平成17年12月末時点でのもの．

写真１　板平遺跡作業風景

写真２　門川町歴史講座（分蔵遺跡）



第１図　東九州自動車道（門川～日向間）関連遺跡の位置（Ｓ＝1/25,000）

第Ⅱ章　確認調査の状況

7 池ノ下（いけのした）遺跡

（1）遺跡の立地

本遺跡は塩見川右岸に位置する比良山の東山麓に立地している。調査区は東へ下る斜面地であり、谷状地形が東西に入り込んでいる。戦後に開墾が行われており、現状ではいくつかの平場も認められる。標高は最高所で37mを測る。

（2）調査の概要

今回の確認調査では調査区東側の緩斜面地に計16本のトレンチを設定し調査を行った。

表土下には二次堆積と思われるK-Ah層が堆積しており、その下は黒褐色土、暗褐色土、褐色土と続いている。大部分のトレンチでは、土砂崩れによるものと考えられる礫が多く認められていた。

出土遺物は暗褐色土から角錐状石器が１点出土している。また表採資料ではあるが打製石斧、弥生土器片などが認められる。遺跡の処置については引き続きの確認調査が必要であろう。

（文責　三品典生）

6 権現原（ごんげんばる）遺跡

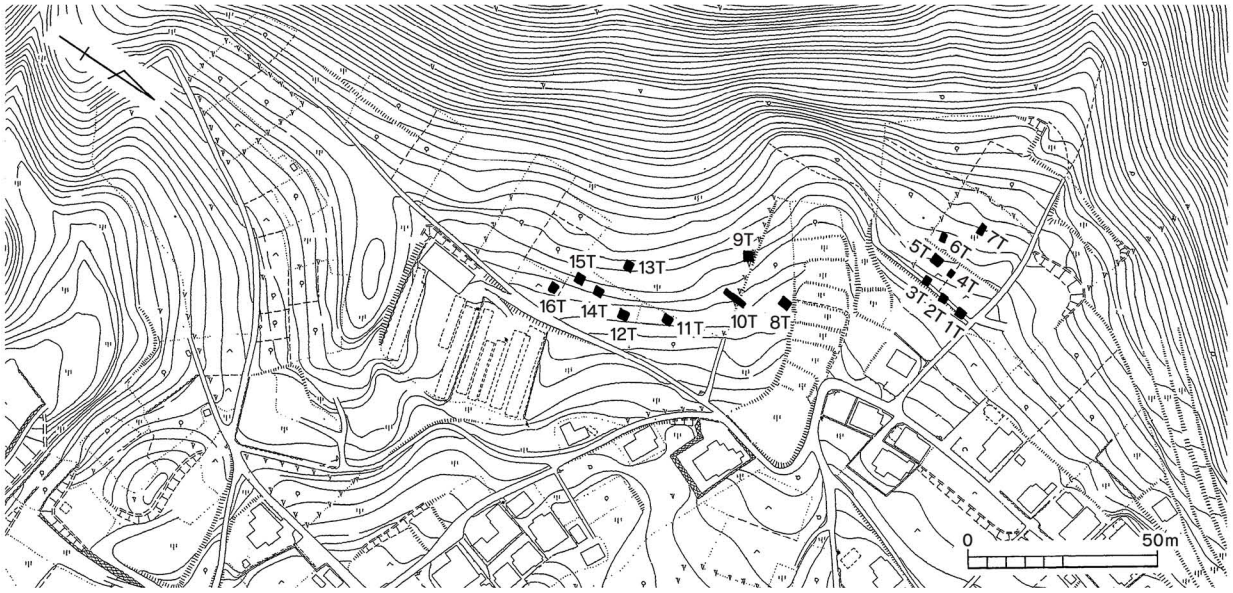
（1）遺跡の立地

本遺跡は塩見川右岸に位置しており、調査区は塩見川右岸に広がる水田と比良山北山麓の斜面地からなる。標高は水田部分で４ｍ、斜面地の最高所では30mを測る。また塩見川を挟んだ対面の丘陵には塩見城跡・中山遺跡が立地している。

（2）調査の概要

トレンチは水田部分に７本、丘陵部分に９本、計16本を設定し、すべて人力のみによる調査を行った。

水田部分の調査では湧き水のためにいずれのトレンチでも掘削が困難であった。そのため、Ｔ１以外では水田の床土までで掘削を終了している。出土遺物としては耕作土中から16世紀代の菊皿片など数点の陶器片が出土したのみであった。床土下の堆積状況については、西日本高速道路株式会社の行ったボーリング調査の結果や、Ｔ１の深掘部分の土層から青灰色の砂質シルト土の堆積が認められる。この層には礫や木片が含まれており、塩見川の沖積作用によって堆積された層である。このことから本来水田部



第２図　トレンチ配置図と周辺地形（池ノ下遺跡）（Ｓ＝1/2,000）

分は、塩見川の氾濫源であったと推測される。

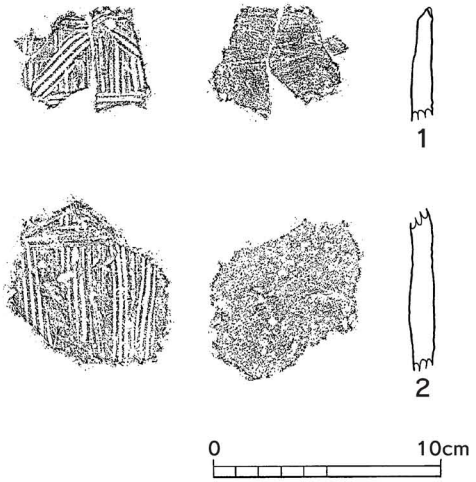
丘陵部分は開墾のために段状に改変されており、トレンチは平場部分（Ｔ８～12）と緩斜面地（Ｔ13～16）に設定をした。

平場部分では表土下には多量の凝灰岩や鉄片などを含む褐色土が堆積しており、造成の跡が確認できた。その下層はいずれも傾斜に沿って斜めに堆積しており、多くの凝灰岩を含んでいた。自然作用により丘陵上部の土砂が流れ出し堆積したと考えられる。その中でＴ10では表土下１ｍほどに堆積している黄褐色土からは縄文土器片２点が出土した(第３図)。出土した土器は鹿児島県鎌石橋遺跡から出土した土器に類似しており、縄文時代早期後半に位置付けられるものである。また表土中からではあるがＴ２からも土器片が出土しているが、細片のため時期などは不明である。緩斜面地では表土下に褐色土が堆積しており、Ｔ14からは土器片が出土している。細片のため型式などは不明であるが、焼成・胎土などはＴ10出土の土器と共通する。

またＴ13では平場部分と同様に造成の跡が確認された。

遺構検出は平場部分・緩斜面地ともに黄褐色土上面で行い、最終的には地盤層である赤褐色土上面まで行った。しかし、いずれのトレンチでも遺構を検出することは出来なかった。

今回の確認調査では数点の遺物が出土したのみで遺構を検出することは出来なかった。水田部分に関しては本来塩見川の氾濫源であり、地元の方の話によると水田として利用されるまでは湿地帯であったようである。丘陵部分では平場部分や緩斜面地が認められたが、いずれも近年の造成によるものであり、それ以前の地形は比較的急な斜面地であったと考えられる。

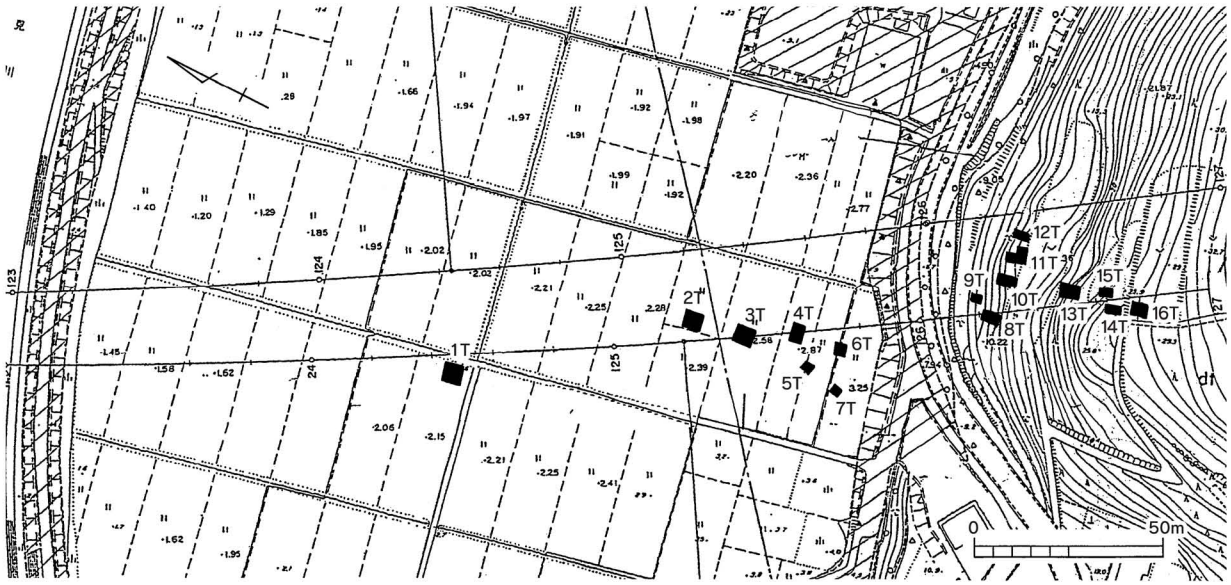


第３図　権現原遺跡出土縄文土器（Ｓ＝1/3）

また堆積状況から調査区内の土砂は丘陵上部からの流出によるものであり、出土した土器片も土砂とともに流れている可能性が高い。この土器に伴う遺構は調査区外の丘陵上部にあると推測される。

以上のことから調査区内に遺構がある可能性は低く、本調査の必要は無いと判断される。

（文責　三品典生）



第４図　トレンチ配置図と周辺地形（権現原遺跡）（Ｓ＝1/2,000）

5 塩見城跡（しおみじょうあと）

（1）遺跡の立地

本遺跡は日向市中央部を流れる塩見川左岸の丘陵上に位置する。丘陵は東西に谷が入り、北側には山地が続いている。標高は最高所で70mを測る。

（2）調査の概要

調査対象範囲は主郭西側の曲輪群と堀切で、土層確認のためのトレンチ調査、及び踏査による縄張り図の作成を行った（第５図）。

主郭西側の曲輪上に１～８のトレンチを設定して調査を行った。いずれのトレンチでも表土下20～30㎝で岩盤が検出され、岩盤上には浅黄色土層（Ⅱ層）が堆積している。Ⅱ層は岩盤の風化土と考えられるが、遺構面の可能性がある。また部分的にⅡ層下に黄褐色土が検出されることから、地山を削り出した後の成形土があった可能性がある。調査範囲が極めて限定されており、遺構の有無や成形土の広がりについては確認できなかった。

なお、いずれのトレンチからも遺物の出土はみられない。

また、トレンチ調査と併行して、城域の踏査を行い、縄張り図の作成を行った。従来作成されていた縄張り図を基にして、踏査の結果を踏まえて加筆、修整したものが第５図である。それによると、主郭の南西方向からの侵入を警戒するように、堀切、曲輪が造られ、尾根上に段状に曲輪群（西側曲輪群）が並ぶ状況が確認できる。東側、北側には単独、あるいは２基程度の曲輪が尾根状に並ぶが、西側曲輪群に比して防御性が低い。

これらのことから、塩見城において西側曲輪群が戦略上最も重要であったと考えられる。出土遺物はないものの、西側曲輪群など対象範囲に含まれる遺構は極めて重要であり、本遺跡は本調査の必要があると判断される。

（文責　渕ノ上隆介）

4 中山遺跡（なかやま）

（1）遺跡の立地

本遺跡は塩見城跡と同一丘陵上に位置しており、塩見城跡とは隣接している。現状の調査区内は段上の畑地となっており、塩見城の曲輪の一部も含まれている。標高は最高所で38mを計る。

（2）調査の概要

今回の確認調査では、遺跡の中央部に位置する二つの段にトレンチを設定し、調査を行った（第５図）。

いずれのトレンチでも、表土から30㎝程度で地山面が検出され、上段北側や下段では四万十層群の岩盤が認められた。また柱痕を有する柱穴が検出され、それらが列状に並ぶことなどから掘立柱建物跡があったと考えられる。１トレンチの西側では非常に浅く、幅の狭い溝状遺構が確認されている。

上段のトレンチ（１～２）では表土、耕作土下に赤褐色土が検出されるところもあり、これらが遺構面である可能性もある。また、下段のトレンチ（３）では、岩盤直上に岩盤の砕片を含む暗褐色土があり、それらの中に炭粒が含まれることから、遺構面であると考えられる。

出土遺物は、旧石器時代の剥片や古墳時代の須恵器、中世の備前焼擂鉢や土師器皿、龍泉窯系青磁、青花、白磁、火打石、近世の磁器碗、瓦、寛永通宝などである。遺構に関連して出土した遺物はないものの、16世紀の遺物を主体とすることから、本遺跡は隣接する塩見城跡と関連性が高く城域の一部、あるいは屋敷地であったと考えられる。

よって本遺跡は、本調査の必要があると判断される。　（文責　渕ノ上隆介）

第５図　塩見城跡縄張り図及び中山遺跡トレンチ配置図（Ｓ＝1/3,000）

第Ⅲ章　本調査の成果

2 板平（いたひら）遺跡

（1）遺跡の立地

日向市北西部に延びる塩見川の支流富高川の左岸に位置し、標高は約20～40mを測る。調査区は、東にある標高122mの山の北側稜線より山裾に沿って南方向に緩やかに傾斜している。

（2）調査の概要

調査区をA～C区に分け、A区北側斜面より調査を実施した。A区は樹木の植林や移植に伴う削平や攪乱による地形の改変が著しい。表土除去後、Ⅳ層またはⅥ層で検出を行った。B区南側は耕作による削平が激しく、表土除去後、Ⅳ層で検出を行った。

①A区上段～中段

斜面上段は、表土下、一部Ⅳ～Ⅵ層が見られるが大部分がⅧ層で、楕円形の土坑を1基検出している。

斜面中段は、Ⅳ層より竪穴住居跡を2軒検出し、埋土中から弥生終末～古墳前期の高杯の口縁や台石・磨石等が出土している。また、縄文時代と思われる炉穴を1基、集石遺構を1基検出しているが、集石遺構は上部を削平されている可能性があり掘り込みは浅い。また、楕円形の土坑を1基検出している。

②A区下段

南東部に谷状地形の落ち込みがあり、その落ち込みにかけてⅡ層・Ⅲ層・ⅤとⅥの混合層から土器片や剥片（ホルンフェルス製、砂岩製）が出土している。また、落ち込み周辺のⅣ層より土坑を9基（楕円形7、円形2）、ピットも多数検出している。楕円形の土坑は、概ね長径2m×短径0.8m×深さ1.5mで陥穴ではないかと考えられる。ただし、土坑やピットからは遺物が出土しておらず、詳細な時期は不明である。

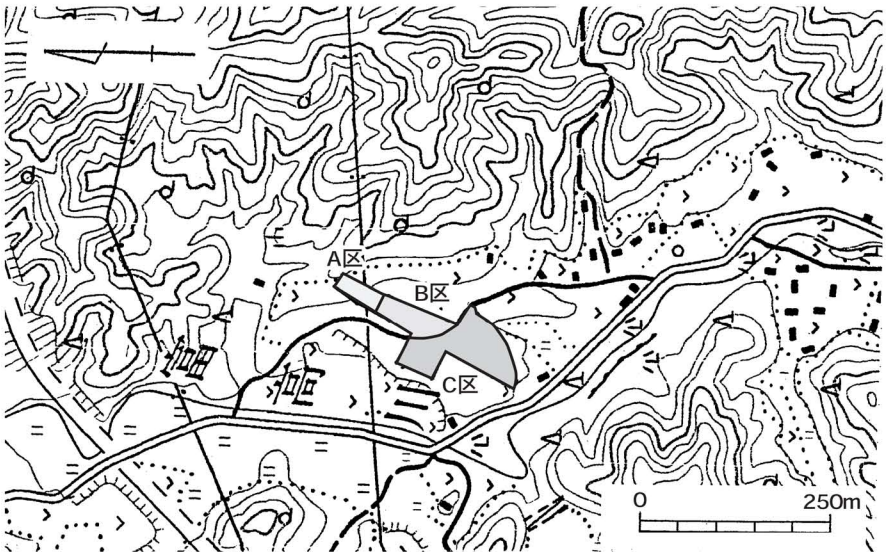
③B区北側

表土中ではあるが貝殻条痕文土器が2点出土している。Ⅳ層より竪穴住居跡を検出し、埋土中から口縁部を欠くがほぼ完形の壺が出土している。また、掘立柱建物跡とみられる柱穴跡を検出している。

（3）小結

住居跡の時期については、出土した土器片等から弥生～古墳時代であると推測できるが、その他の遺構については、遺構に伴う遺物がほとんど出土しておらず、時期の特定が出来ていない。今後、遺物の整理や遺構の検討によって、本遺跡の様相が明らかになってくるものとみられる。

（文責　向江修一）



第6図　調査区と周辺地形（S＝1/10,000）

表2　基本層序

Ⅰ層	表土
Ⅱ層	2次アカホヤ
Ⅲ層	暗褐色土
Ⅳ層	褐色土
Ⅴ層	黒褐色土ブロック
Ⅵ層	ＡＴ
Ⅶ層	小礫混じり褐色土
Ⅷ層	褐色粘質土
Ⅸ層	礫層

1 分蔵（ぶんぞう）遺跡

（1）遺跡の立地

五十鈴川下流の右岸、戸高山から北東へ伸びる尾根の先端部に位置する(写真３)。標高は７～８ｍで、現在は宅地となっている。

（2）調査の概要

今回の調査は橋脚部分の調査であり、各橋脚部分を便宜上Ｂ区、Ｃ区と呼称し、調査を行った（写真３）。

本遺跡は、宅地造成に伴うと思われる造成土が約60㎝程度盛られており、造成土中からは突帯文土器を中心とする縄文時代晩期の土器が認められた。さらに下位の層は、河川堆積に起因すると思われる砂礫層及び砂質土層で構成されており、それらが互層状に堆積している（表３）。

Ｂ・Ｃ区ともに遺構は確認されなかったが、Ｂ区において縄文時代後期から晩期にかけての遺物包含層が認められた。遺物包含層は主に砂礫層直下の砂質土層であり、砂礫層の堆積状況から３段階に大別することができる。以下にＢ区を中心として遺物包含層の概要を記す。

表３　基本土層

Ⅰ層	造成土①
Ⅱ層	造成土②
Ⅲ層	砂利・砂礫層
Ⅳ層	砂質土層
Ⅴ層	砂利・砂礫層
Ⅵ層	砂質土層
Ⅶ層	砂利・礫層
Ⅷ層	砂質土層
Ⅸ層	砂質土層（地山）

①第Ⅷ・Ⅶ層

地山直上に認められる砂質土層（Ⅷ層）中より縄文土器の小片が出土している。黒色磨研土器が出土しており、天城式段階に相当すると考えられる。また、上層の砂礫層（Ⅶ層）より石錘が出土している。

②第Ⅵ・Ⅴ層

縄文時代後期終末（天城式段階）の土器とともに、打製石斧や横刃状石器、石錘、敲石、石

写真３　分蔵遺跡空中写真（西から）

写真４　分蔵遺跡出土遺物

鏃、剥片等の石器類が出土している。調査区東側では、天城式の浅鉢や深鉢が集中して出土し、中でも深鉢は１個体に復元可能なものがまとまった状態で出土した。石斧や石錘などの大型器種の多くは砂岩製で、川原石に含まれる円礫を加工したものである。石鏃や剥片などの小型石器類は、チャートやホルンフェルス製のものであり、器種に応じた石材選択がなされていたと考えられる。

③第Ⅳ・Ⅲ・Ⅱ層

縄文時代晩期前半（黒川式・無刻目突帯文土器段階）の土器とともに、石錘などの石器類が出土している。小片も多いが、底部や口縁部など時期を特定しうる資料も多い。第Ⅵ層と同様に石錘は砂岩製である。

（３）小結

本遺跡は、円礫を多く含む砂礫層や砂層で構成されることから、河川の氾濫などに伴う侵食・堆積作用によって形成されたと考えられる。よって出土した遺物は、そうした氾濫作用によって当地に堆積したものと考えることができる。

第Ⅵ層出土の天城式土器は破片が大きく、浅鉢や深鉢がまとまった状態で出土しており、土器の移動距離が比較的短いものと想定できる。一方、黒川式土器や無刻目突帯文土器は小片が多く認められ、出土量も少ない。これらのことから、後期終末の天城式段階には遺跡周辺の比較的近い場所に、また晩期後半には遺跡から少し離れた場所に集落などの生活の場が営まれていた可能性が想定できる。

これらの集落では、石錘が認められることから五十鈴川を中心とした漁撈生活を営んでいたと考えられる。また打製石斧や横刃状石器が出土するなど、原初的な農耕が行われていた可能性も考えられる。さらに石鏃が出土することも考慮すれば、漁撈、農耕に加え、狩猟も行われる多様な生業戦略のもとに営まれた集落であったと想定される。

なお、門川町域ではこれまでに海岸部の門川南町遺跡において縄文時代後期中葉から晩期にかけての集落跡が、また山間部の赤木遺跡では後期中葉の遺跡が確認されている。縄文時代後・晩期の門川町域が中九州地域あるいは南九州地域との密接な交流が行われていたと考えられる。　（文責　渕ノ上隆介）

報告書抄録

ふりがな	ひがしきゅうしゅうじどうしゃどう（かどがわ～ひゅうがかん）
書名	東九州自動車道（門川～日向間）関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書
副書名	
巻次	Ⅰ
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第132集
編著者名	菅付和樹　向江修一　今塩屋毅行　三品典生　大野義人　井上美奈子 渕ノ上隆介　岡田　諭
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター
所在地	〒880-0212　宮崎市佐土原町下那珂4019番地　ＴＥＬ　0985-36-1171
発行年月日	2006年３月20日

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第132集

東九州自動車道（門川～日向間）関連
埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅰ

2006年３月20日

編集　宮崎県埋蔵文化財センター
発行　〒880-0212　宮崎市佐土原町下那珂4019番地
TEL 0985-36-1171　FAX 0985-25-7286

印刷　有限会社　河野印刷
〒882-0033　延岡市川原崎町453番地
TEL 0982-33-2249　FAX 0982-23-1454